

荻田泰永著「考える脚」 北極冒険家が考えるリスクとカネと歩くこと

本書は「空白の五マイル」「アグルーカの行方」の探検家・角幡唯介が一目置く日本最強の冒険家荻田が前作「北極男」2013年11月（講談社）に引き続き世に問う2作目である。

前作では日本人初の無補給単独徒歩での北極点到達を目指した2012年の旅までで終わっており、本書はその後の活動が述べられ3章にて構成されている。

第一章 冒険と無謀の狭間—北極点無補給単独徒歩挑戦（2014年）

第二章 未知への憧れ —カナダ〜グリーンランド単独行（2016年）

第三章 資金の壁 —南極点無補給単独徒歩（2017〜2018）

第二章はカナダ最北の村グリスフィールドからグリーンランド最北の村シオラパークまで1000kmの単独徒歩行でこれは世界初踏破という快挙であり、これにより著者は2017年度植村直己冒険賞を受賞している。

又、第三章南極点無補給単独行は日本人初という快挙として、大きな評価を受けているが、荻田が拘るのはあくまでも北極点であり、本書も第一章に最もページ数を割いている。そして荻田は言う。「北極に比べて南極は易しい。少しも難しくなく簡単だった。北極点には3度挑戦してまだ完遂してないが、南極に比べると北極は30倍位難しく、例えて言えば北極はボクシングヘビー級世界王者マイク・タイソンとの戦いであり、南極はバンタム級日本ランク10位位の選手との戦いのようなもの。マイク・タイソンと10ラウンド戦ってきた身からすれば、バンタム級日本ランク10位程度の選手との戦いでは負ける気がしない」と。

揺れ動く海氷、立ちふさがる乱氷やリード（氷が割れて歩けない海）、北極熊の襲来、極寒の環境等の北極に対し、南極では氷原は動かず、熊は生息せず、乱氷もなく、クレパスの位置もあらかじめ事前で予測できてしまい、毎日歩く、寝る、飯を食うを50日繰り返していたら南極点に着きましたというだけの様なものという。拘るのはただ無補給だけ、途中で一度でも補給を受けてしまえば何の価値もないと素っ気ない。エベレストを無酸素で登るか、酸素を吸って登るかの違い以上な大違いと宣ってはばかり、本年1月、南極点徒歩到達と騒がれた浅草の力車マン阿部雅龍も無補給目指しながらも途中で一度補給を受けてしまい形無しである。本書も北極点無補給単独徒歩の第一章がハラハラ、ドキドキさせてくれて格段に面白い。読みながら「なんで、そこまでするか!？」と幾度思った事だろう。

18年間で15回の北極行、「なぜ何度も北極なのか？」という問に対し「海外で北極以外の場所に行った事がなく土地勘あるのはここだけ、知らない所へ行くのは怖いから」と答える荻田、やっぱり相当に変な奴だ。世界有数の北極冒険家と世界中から注目される荻田だが、彼も40歳を超え体力は格段に低下している。これからどうするのか、そこが大きな課題であり悩ましいところであるに違いない。

2019年3月「KADOKAWA」刊 1500円

(AKA)

